

■ Article

箱庭制作者の主観的体験に関する研究法の検討

—多元的方法・方法のトライアングレーション、M-GTAを中心に—

楠本和彦

(南山大学人文学部心理人間学科)

要旨

本稿は、筆者が実施した箱庭制作者の主観的体験に関する研究法について、多元的方法・方法のトライアングレーションの観点、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）による分析の観点から、検討することを目的とした。

その両観点から、一連の筆者の研究と先行研究を比較検討した。検討により、研究法における、筆者の研究のオリジナリティは、同一データに対してM-GTAと単一事例質的研究という2種の異なる質的研究法により、多角的、総合的にデータを分析し、知見を得ている点にあった。異なる質的研究法を併用することにより、単一の方法では、明らかにすることが困難であった観点から分析することが可能になり、総合的な考察が可能になったことが確認された。

キーワード：多元的方法、方法のトライアングレーション、M-GTA、質的研究法の併用

I. 問題および目的

一連の筆者の研究（楠本、2011、楠本、2012、楠本、投稿中）は、一人の調査参加者のデータに関して、質的な分析を行ったものである。楠本（投稿中）でも、筆者が行った箱庭制作面接^{*1}の調査研究の研究法について検討を行ったが、部分的な検討に留まっていた。そのため、本稿は、より包括的に、筆者が実施した研究法について、多元的方法・方法のトライアングレーションの観点、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）による分析の観点を中心に、検討することを目的とする。なお、研究法を除く、箱庭制作過程・説明過程における制作者の主観的体験に関して、別稿「箱庭制作過程・説明過程に関する調査研究についての文献研究」で検討した。

筆者が実施した箱庭制作面接の調査研究は、調査方法、分析方法の両者において、オリジナルな面や限界、今後の課題を有するため、主に、それらの検討が必要となる。その調査方法、分析方法は、別稿「箱庭制作過程・説明過程に関する調査研究についての文献研究」に詳述したため、それを参照いただきたい。本稿では、Ⅱで、多元的方法・トライアングレーションについて検討する。Ⅲでは、M-GTAによる箱庭制作者の主観的体験に関する研究について検討する。Ⅳで、結論として、検討のまとめを行う。

Ⅱ. 多元的方法、トライアングレーション

Ⅱ-1. 多元的方法、トライアングレーションを採用する意義

楠本（投稿中）でも検討したが、一連の筆者の研究における調査方法、分析方法は、多元的方法（multiple methods）、方法のトライアングレーションと捉えることができる。まずは、多元的方法とトライアングレーションの定義について確認したい。多元的方法とは、「同じ研究デザインの中で異なる方法を組み合わせること。方法を組み合わせる目的は主に2つに分かれる。ひとつは加法的なもので、異なる（しばしば一連の）下位トピックスをそれぞれ異なった方法で扱い、これらの方法を組み合わせることである。もうひとつは、相互作用的なもので、同じ下位トピックスに対し異なる角度からアプローチするものである」（Bloor&Wood、2006、p.132）。また、トライアングレーションとは、「ひとつの現象に対してさまざまな方法、研究者、調査群、空間的・時間的セッティングあるいは異なった理論的立場を組み合わせることを意味する」（Flick、1995、p.282）。

次に、質的研究において、多元的方法とトライアングレーションという方略をとることの意義について確認したい。Denzin&Lincoln（2000）は、質的研究における多元的方法、トライアングレーションに関して以下のように述べている（p.6）。

質的研究は、もともとマルチメソッド（多元的方法）指向である（Flick、1998、p.229）。しかしながら、マルチメソッド、あるいは、トライアングレーション（三角測量的方法）の利用は、テーマとなっている現象を真意から理解しようとする努力を表している。客観性のある現実が得られることはけっしてない。私たちは対象を表象によって知り得るだけである。トライアングレーションは、妥当化（性）のためのツールや戦略ではなく、妥当性（化）そのものとおき換えられるかもしれない（Flick、1998、p.230）。したがって、ある1つの研究において多様な手法、経験的資料、視点、観察者を組み合わせて利用することは、探究に厳密さ、広がり、精緻さ、豊潤さ、深みを付加する研究戦術だと考えるのが最も適切である（Flick、1998、p.231）。

多元的方法、トライアンギュレーションに対する同様の評価は、他の研究者によってもなされている。Flick (1995) は、「トライアンギュレーションは質的方法で得られた知見を基礎づけるひとつの手段である。この場合には、基礎づけは研究結果をテストすることではなく、認識の可能性を系統的に広げ完全なものにすることで達成される。この点で、トライアンギュレーションは、研究の結果と手続きとを妥当化する戦略というよりも、調査手続きのはばの広さ、深さ、一貫性を高める妥当化の一戦略といえる」としている (p.283)。Bloor&Wood (2006) も、「多元的方法の使用には、相互作用的な多元的方法を使えば、分析結果の妥当性を保証できる」といった誇張気味の主張がつかまとう。これは事実ではない。(中略)しかし、多元的方法(加法的、相互作用の両方)をとることは厳密な研究デザインの証となっている」と評価している (p.133)。また、トライアンギュレーションに関して、「異なる方法から導き出された結果からの補強で、妥当化を成し遂げられないことは明らかである。しかし、異なる方法から得られたデータの比較は役に立たないわけではない。逆にそうした比較が分析を深め広げることになるだろう。実際に、上記の比較が多元的方法を用いるリサーチデザインが人気のある主な理由のひとつであり、それが分析を刺激している」との結論にいたっている (Bloor&Wood, 2006, p.154)。もともとトライアンギュレーションは、個別の方法で得られた研究結果を妥当化する方略、人間の意識とは関係なく一つの客観的事実を明らかにするために発想・使用されはじめたものであるが (Flick, 1995, p.283, Bloor&Wood, 2006, p.152)、現在では、そのような意味での方略ではなく、質的研究に厳密さ、広がり、精緻さ、豊潤さ、深み、一貫性を付加する研究戦術と理解されていることがわかる。

続いて、Denzin (1989) のトライアンギュレーションの4つの分類を取り上げ (Flick, 1995, pp.282-283)、方法のトライアンギュレーションについて、確認する。

a) データのトライアンギュレーション

異なったデータのソースを用いることである。この下位タイプとしてデンジン、時間、空間、人を分けて考えている。そして、ある現象について異なった時点や場所で調べたり、またさまざまな人からデータをえることが勧められている。

b) 調査者のトライアンギュレーション

「研究者の個人的傾向が研究に与える歪みを明るみに出したり、また最小限に抑えたりするために、異なった複数の観察者やインタビュアーを研究に参加されるというものである。(中略)異なった研究者が調査対象や研究結果に対して及ぼす影響を系統的に比較することに重点がある」。

c) 理論のトライアンギュレーション

「この出発点は『さまざまな視点や仮説を考慮に入れてデータにアプローチすることであり、その際にさまざまな理論的立場を、それらの有用性と説明力

とを検証するために並行して用いることである』(Denzin, 1978, p.297)。このタイプのトライアンギュレーションによって認識の可能性を基礎づけたり拡大したりすることが目指される」。

d) 方法のトライアンギュレーション

「ひとつの方法内のトライアンギュレーションと、異なった方法間のトライアンギュレーションという2つの下位タイプに区別される。前者(方法内のトライアンギュレーション)の例は、ある質問紙の内部でひとつの事象を測るためにさまざまな質問項目を用いることである。その質問紙を半構造化インタビューと併用すれば後者(方法間のトライアンギュレーション)の例となる」。

先にも記したように、トライアンギュレーションは、質的研究において、重要な方略である。Bloor&Wood (2006) は、この4つのタイプのトライアンギュレーションのうち、「一般的には方法論的トライアンギュレーションが最も着目されており、トライアンギュレーションを通して妥当性に耐えうるものとするためには、多元的方法調査デザインによって方法論的な厳密さを示すことが、質的研究者にとって研究を計画する際に、ほとんど義務的なものとなっている」と述べている (p.152)。先に述べたように、現在では、トライアンギュレーションは研究結果の妥当化の方略や客観的事実を発見する方略とは理解されていない向きもあるが、それでもなお、方法のトライアンギュレーションや多元的方法調査デザインが質的研究において、有意義であることがわかる。

II-2. 多元的方法・方法のトライアンギュレーションという観点からみた筆者の研究法

別稿「箱庭制作過程・説明過程に関する調査研究についての文献研究」に、一連の筆者の研究における調査方法と分析方法を記した。本節では、その調査方法、分析方法を多元的方法・方法のトライアンギュレーションという観点から捉えなおしてみたい。

1) 調査方法

筆者の研究における調査は、a) 箱庭制作面接の1.制作過程、2-1.自発的説明過程と2-2.調査的説明過程、b) 箱庭制作面接のビデオを視聴しての内省報告作成、c) 調査参加者の内省報告を調査者と共有化するふりかえり面接、d) 全過程のふりかえり面接から構成されている。これらのうち、1つのセットとなるa) からc) までの調査構造を図示すると図1のような包含関係となる。各面接、各過程について、方法論の観点から記述していく。

a) 箱庭制作面接 1.制作過程

この過程は、制作者が箱庭を制作していく過程である。両調査参加者は、概ね無言で箱庭を制作した。そのため、それに呼応して、調査者は制作過程中、内的にはさまざまな感覚・感情・イメージなどを味わいつつ、無言で、見守ることになった。その場において、調査者は見守り手あるいは広い意味でのセラ

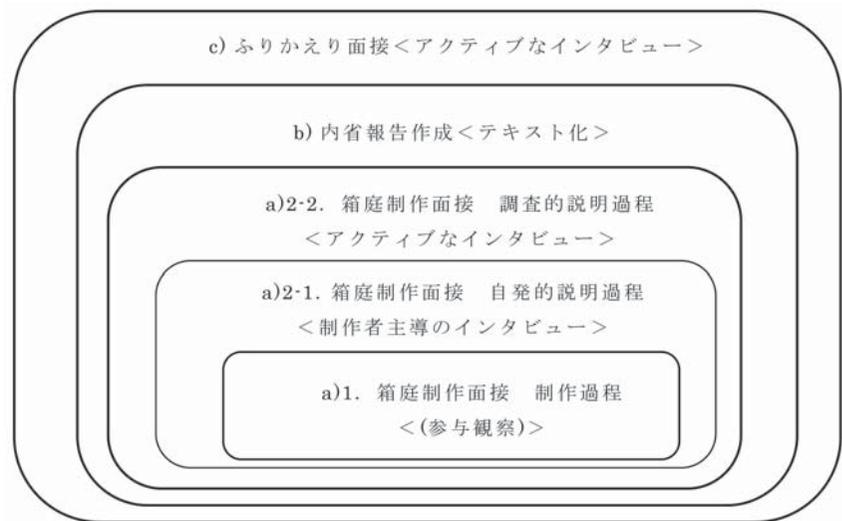


図1 調査構造図

ピストとして、その場にいた。しかし、それを、従来の調査方法にあえて翻訳すれば、参与観察をしていたという風にも捉えることができるだろう。そこで、図1では、一種の留保の意味もこめて、()付の参与観察とした。

a) 箱庭制作面接 2-1.自発的説明過程

これは、説明過程のうち、先に行われる、通常の箱庭療法と同様の説明過程である。自発的説明過程で、制作者は、制作中と制作終了時点での感覚、感情、イメージ、意図、考えなどを自発的に語った。調査者は、それを傾聴することを中心的な態度として臨んだ。そのため、これは制作者主導のインタビューと考えることができる。

a) 箱庭制作面接 2-2.調査的説明過程

これは、説明過程のうち、自発的説明過程に続いて調査目的のために行われる説明過程である。調査的説明過程では、調査者は、より積極的に対話や質問を行い、箱庭制作過程と自発的説明過程における、制作者の主観的体験の言語化を促した。そのため、これは「アクティブなインタビュー」と捉えられる。アクティブ・インタビューは、インタビュアーとインタビューイが協同で知識を構築することに貢献していることを認め、それを意識的・良心的にインタビューデータの産出と分析に組み込んでいく (Holstein&Gubrium、1995、p.22)。この調査的説明過程でなされたことは、アクティブ・インタビューと共通点もっている。そのため、「アクティブなインタビュー」とした。

b) 内省報告作成

箱庭制作面接のビデオ (制作過程、自発的説明過程、調査的説明過程) を制作者・調査者が視聴し内省報告を書き綴った。調査者が設定した「意図」「感覚・感情・イメージ」「連想」「意味」の4カテゴリーについて、制作過程では5要

因（1. ミニチュアの選択、2. ミニチュアの配置、3. 砂の造形、4. 位置・ミニチュア・造形の変更、5. セラピストの存在・行動）に関して、説明過程では制作者や調査者の言動に関して、内省報告を記述した。上記要因に関する内的プロセスが文章化された。そのため、これは、内的なプロセスをテキスト化する行為と捉えることができる。

c) ふりかえり面接

ふりかえり面接は、箱庭制作面接における制作者の主観的体験を、調査者と共有するとともに、その内容を明確化するために行われた。ふりかえり面接では、制作者が制作過程、自発的説明過程、調査的説明過程に関する内省報告を行い、調査者と共有するとともに、調査者が明確化すべきと考えた点に関して確認した。そのため、この面接もまた、アクティブなインタビューと捉えられる。

また、記録方法に関して、a) 箱庭制作面接は、ビデオ録画された。b) 内省報告は、エクセルファイルで作成され、制作者の内省報告のプリントアウトと電子データは調査者と共有された。c) ふりかえり面接は録音された。

このように、参与観察、インタビュー、テキスト化という多元的なデータ収集を行った。また、記録方法としても、ビデオ録画、録音、テキストと多様な方法を用いている。そして、各面接、各過程が時系列で包含関係となっている。このように筆者が行った調査方法は、多元的・体系的なデータ収集を行っており、多元的方法・方法のトライアングレーションと捉えることができる。

2) 分析方法

楠本（2012）では、M-GTAを用いて質的分析を行った。M-GTAに関する詳細な検討は、Ⅲで行う。本節では、まず、楠本（投稿中）の単一事例質的研究に関して、検討し、次いで、同一のデータに対して、M-GTAと単一事例質的研究の2つの方法を併用する分析方法について検討する。

(1) 単一事例質的研究

単一事例質的研究の分析を可能にするためには、一覧表化が重要であった。箱庭制作面接各回の制作過程、自発的説明過程、調査的説明過程、内省報告、ふりかえり面接の各データの関連を探るために、各過程のデータを制作者が任意に区切った制作過程毎に、一覧表に再構成した（表1にA氏第2回面接の一部抜粋を例示）。

表1 第2回箱庭制作面接における主な主観的体験 (楠本、投稿中)

制作過程	自発的説明過程	調査の説明過程	内省報告	ふりかえり面接
(3)【川によって二つに分けられた土地を見ている】	【制作中の苦しさ】(3)しばらく作って、苦しいですよ。なんかくはあ、苦しい>うん。苦しいっていうかね。人気がないというか、寂しいというか。二つに分かれちゃったなと思って。(後略)		(3)【制作・感覚】大地もいまだ生命が早く乾燥していて、荒涼としたイメージが私に迫ってきた。「こんなに広い川を作ってしまっとうしよう」「生命のない大地がおそろし」と感じていた。	
(9)【ライオン、羊、恐竜を手にとる。恐竜は棚に戻す。ライオンは陸地の右手前に、茂みの陰から草食獣をねらうような位置に置く】			(9)【制作・意味】ライオンに恐竜といった力強いもの、時に凶暴なものに憧れるような親近感のような感覚を覚く、自分が生きていくためには時に相手を喰らうことも必要。	
(11)【白い石を左の陸地奥、川岸に置く。左手前の山を奥に移し、ふもとに土偶と埴輪を置く】	【石と土偶、埴輪】(11)この辺の手前のほうにはちよっと置けな。手前のほうにいる生き物とはちよっと違う生き物のような気がして置けなかつたですね。	【土偶、埴輪】(11)なんか命なんだけど、命を持っている人として持ってきたんですけどね。半分命じゃないものになっているっていうか、何でいって言うんでしょうかね。人間ではない命になって、どう動物や人の世界にはちよっといけなさんだ。入ってきちゃって。そういう感じですかね(後略)	(11)【制作・感覚】土偶もいのちの表現だと思っていたが、ふもとに置いたことで、命としての人間の代わりのようでもあるし、山の番人のような気もしてきた。「制作・意味」石は「かたまり」。自然の造形物だけれども、生命感も強く、動き出すことがないもの。私が左側に置きたかった命とは、そのようなものだったのではないか。ぼっきりとした形をまだ持たない、抽象的なものがよかったのだと思う。	【土偶、埴輪】(11)土偶はだいたい神様の方に近い。象徴的になってしまっている。深く土の中にもぐって何世紀も経って命の感覚がひどく微かになってしまっている。 【お山】(11)信仰の対象になるようなお山のイメージがありましたね。そうするとお山のふもとに土偶達はいかにもふさわしい。ちょうど山と平地とのちょうど境目辺りに居てくれると、ちょうどいい。
(12)【棚に青い鳥を見つけて、白い石の上にのせる】	【青い鳥】(12)実はずっと作ってる最中、なんか、こうどうしていいんだらうとかね。すごい苦しいんですよ。あの青い鳥を見つけて置いた時に、ああよかったと思いましたね。<ふうん、苦しさは>なくなりましたね。<なくなった>はい、ほっとしました。あれも何か他のものを探して行って、たまたま眼に入っ、青い鳥がああ、これだ。あの青い鳥を置いた段階でほとんどもうこれでいいかな。完成してもいいかなと思ったんですけども。(後略)		(12)【制作・連想】青い鳥が目に入ってきて瞬時に、幸せの青い鳥、という言葉が思い浮かんでいた。「制作・意味」青い鳥は意図しないところからやってきた意図を超えているという感じがそもそもない。これを見つけた途端、私がそれまで作っていた箱庭の調子、トーンが変わった。箱庭ではなくて、変わったのは私の心の調子かもしれない。	
(13)【輪の親子を川に浮かべる】	【川の輪】(13)もうちょっと何か命というか感じたいなと思って棚に戻って。で、この鳥を見つけて。(中略)こうのんびり遊んでる感じにして。		(13)【制作・意図】青い鳥を置いたことで、気持ちに余裕が出たように感じた。	

一覧表化により、多元的に収集された制作者の主観的体験の比較が可能となり、次の分析を行った。a) 制作過程毎に、制作行為、制作内容、制作者と調査者との対話等に関する、制作者の多様な主観的体験について、その内容や関連性を把握・分析した。b) 各箱庭制作面接での、制作の経過による制作者の主観的体験の変容や関連性を把握・分析した。c) すべての面接の主観的体験を比較し、テーマの系列的理解や面接の展開、その個人的意味について、多層的・総合的に把握・分析した(楠本、投稿中)。これらの分析、特にc)は、事例研究法と類似点をもつ。そのため、楠本(投稿中)では、単一事例質的研究を事例研究との関係から検討した。長くなるが、以下に、原文にある注を除き、引用する。

一方、本稿は、継続した箱庭制作面接におけるテーマについての系列的理解を行ったため、事例研究とも類似点をもつ。山本(2001)は、事例研究を「臨床の事例研究とは、臨床現場という文脈で生起する具体的事象を、何らかの範疇との関連において、構造化された視点から記述し、全体的に、あるいは焦点化して検討を行い、何らかの新しいアイデアを抽出するアプローチである」と定義している(pp.15-19)。その定義を参照すれば、本研究は、制作者の自己実現・自己成長の促進と調査研究を兼ねた、箱庭制作面接に関して、説明や内省報告により収集された制作者の主観的体験に焦点を当て、単一事例の全体像を厚く記述すること(thick description)により、制作者の主観的体験の変容や面接の展開、その個人的意味を検討し、明らか

にした、と定義できる。しかし、本研究は多元的方法を用いた点で、一般的な事例研究と異なっている。そのため、本研究を事例研究とはせず、「単一事例質的研究」と呼びたい。

以下に山本（2001）の事例研究についての定義と、それを参照した楠本（投稿中）の単一事例質的研究の定義を段階的に確認していきたい。山本は、「臨床現場という文脈で生起している」とは、実験研究や調査研究とは異なり、フィールドワークと共通する重要な要件であるとする。心理臨床を構成する複雑な要因である、制度的・構造的・対人的・心理的な「文脈（context）」の中で生起する事象に対して、臨床家が関わりながら観察し、対象化するという難しい作業が含まれると指摘している（pp.17-18）。筆者の単一事例質的研究の一方の側面は、調査研究であるが、もう一方の側面は、制作者の自己理解・自己実現・自己成長の促進を目的とした心理臨床面接である。つまり、筆者の研究の場合、これには、「制作者の自己実現・自己成長の促進と調査研究を兼ねた」（楠本、投稿中）が該当すると考えた。

山本（2001）は、研究方略として「事例」を取り上げる際に必要な要件の一つとして、検討の対象となる事例に帰属する範疇（カテゴリー）が必要であるとしている。そして、事例概念には何らかの類型に分類する作業が想定され、その分類としてクライアントの問題像（例、分離不安の不登校の事例、境界性人格障害の事例）やアプローチの方法（例、夢分析の事例、自律訓練の事例）を挙げている（p.15）。筆者の研究の場合、この範疇としては、「箱庭制作面接に関して」（楠本、投稿中）が該当すると考えた。

山本（2001）は、「構造化された視点から記述し」とは、事象を対象化する際の「視点」ないしは「認知枠」の重要性の指摘であり、研究のねらいと枠組みを明確に意識し、それらを構造化することが大切だとする（p.18）。筆者の研究の場合、「説明や内省報告により収集された制作者の主観的体験に焦点を当て」（楠本、投稿中）がこれに該当すると考えた。

山本（2001）は、「全体的に、あるいは焦点化して検討を行う」とは、事例検討法の2つの方向性を規定したものであるとする。つまり、一つの事例の全体像の本質を詳細に厚く記述（thick description）する方向なのか、事例の特定の側面に焦点をあわせて、研究に不可欠な「重要な事実」（material facts）のみに限定して検討するののかということ、と説明している（p.18）。筆者の研究の場合、これには、「単一事例の全体像を厚く記述すること（thick description）により」（楠本、投稿中）が該当すると考えた。thick descriptionは、Geertzが提唱した概念であり、厚い記述、または、ぶ厚い記述と訳されることが多い。「社会的行為を厚く記述するとは、特定のエピソードを特徴づける状況、意味、意図、方法、動機などを記録することによって社会的行為を解釈し始めることである。記述が厚くなるのは、このような解釈をさしはさむと

いう特質のためであって、単に細目の詳しさだけの問題ではない」(Schwandt, 2007, p.3)。

山本(2001)の「何らかの新しいアイデアを抽出するアプローチである」(p.16)には、筆者の研究の場合、「制作者の主観的体験の変容や面接の展開、その個人的意味を検討し、明らかにした」(楠本、投稿中)が該当すると考えた。

まとめると、単一事例質的研究では、上述のa)により、制作過程毎に、制作過程、両説明過程における制作者の主観的体験の内容や関連性を把握・分析することができた。b)により、各箱庭制作面接での、制作者の主観的体験の全体像を多層的・総合的に把握・分析することができた。そして、c)により、単一事例の全体像を厚く記述すること(thick description)や、それらを多層的・総合的に把握・分析できた。それらの総合的考察によって、「制作者の主観的体験の変容や面接の展開、その個人的意味を検討する」(楠本、投稿中)という目的を達成できたと考える。

(2) 同一データに対して、M-GTAと単一事例質的研究との併用を試みる意義

ここでは、同一データに対して、M-GTAと単一事例質的研究という異なる分析方法を併用する理由や意義を確認したい。この点に関して、楠本(投稿中)でも検討を行っているため、まずはその部分を引用したい。

楠本(2012)では、本稿と同一のデータに対して、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)を用い、理論生成した。M-GTAは、データに密着した理論生成が可能であるが、各回のデータは概念生成に活用され、豊富で、詳細なデータを直接的に記述し分析することや、事例の継時的な変化を追うことは困難となる。楠本(2012)では、M-GTAの標準的な研究に比べ具体例を多く示す工夫を行ったが、例示できるディテールには限りがあった。そこで、本稿では「単一事例質的研究」により、より多くのディテールを直接的に記述し、それを多層的・総合的に分析した。同一のデータを用いて、M-GTAによる分析とディテールを直接的に記述分析する質的研究を並行することは、可能であり、意義あるものと考えられている(木下、2003、pp.102-104)。

次に、M-GTAと事例研究との関係に関して、木下の考えを再確認したい。木下(2003)は、「グラウンデッド・セオリー・アプローチで分析をまとめ論文を完成させた後で、もうひとつのまとめ方としてインタビューのなかにとくに豊富なデータを提供してくれた人がいればその人についての事例分析も可能である。(中略)詳しいデータを提供してくれる人はグラウンデッド・セオリー・アプローチにおいても分析上貴重な存在なのであるが、(中略)この方法では被面接者個人のまとまりは保持されないので、事例としてまとめる方法も可能

である」としている (p.104)。同様の見解は、木下 (2009) でも、述べられている (p.18、p.29)。

ただ、楠本 (2012) は、A氏一人の、10回に亘る箱庭制作面接のデータをM-GTAにより分析したものであるため、グラウンデッド・セオリー・アプローチ (GTA) では「被面接者個人のまとまりは保持されない」(木下、2003、p.104) という記述は直接的には当てはまりにくい。しかし、A氏のデータをM-GTAで分析した場合、先に引用したように、「各回のデータは概念生成に活用され、豊富で、詳細なデータを直接的に記述し分析することや、事例の継時的な変化を追うことは困難」となった (楠本、投稿中)。そのため、木下 (2009) で推奨されているように (pp.34-36)、M-GTAの分析結果であるカテゴリー、サブカテゴリー、概念も意識し、利用しつつ、M-GTAと単一事例質的研究を併用することが、研究目的に照らして効果的であると判断した。

一連の筆者の研究は、M-GTAと単一事例質的研究の併用という点から、分析方法においても、多元的方法、方法のトライアンギュレーションと理解することができる。

II-3. 多元的方法・方法のトライアンギュレーションという観点からみた 先行研究

本節では、箱庭制作者の主観的体験に焦点を当てた先行調査研究を、多元的方法・方法のトライアンギュレーションという観点から、捉えなしてみたい。先行研究の中には、その論文内では、多元的方法・方法のトライアンギュレーションという用語が使用されていないなくても、実際には、そのような研究方法をとっているものが少なからず存在するためである。

石原 (2008) は、M-GTAを準用した調査研究の成果と臨床事例とを総合的に検討・考察している。また、M-GTAの調査手続きにおいて、a) 箱庭制作をビデオ録画している。b) 制作終了後に制作者の主観的体験に関する質問紙によるデータ収集を行っている。c) 質問紙の回答に対して、インタビューを行い、それを録音している。

平松 (2001) は、箱庭療法面接のための体験過程スケール (EXPsp) を用いた数量的調査研究を行っている。2事例に対して、事例研究とEXPspによる評定との総合的研究を実施している。

清水 (2004) では、調査Iにおいて、a) 制作過程をビデオ録画している。b) 制作終了後、制作者と立会人から、質問紙によるデータ収集を行っている。c) 調査Iの翌日に行われた調査IIでは、制作者に箱庭制作のビデオ記録を見せ、その中の注目場面に関して、自由な語りを求めている。また、質問紙の記述内容の補足説明を求めている。そのインタビューを録音している。そして、分析においては、d) 注目場面毎に、制作者・立会人・非立会人の主観的体験を一覧表化し、その資料を基にプロセス研究を行っている。

伊藤 (2005) は、a) 制作過程をビデオ録画している。b) 制作終了後、制

作中と制作後の内観を問う質問紙によりデータ収集している。分析においては、c) 先行研究で実施したイメージと意識の関係性に関する4類型を基に、事例研究を行っている。

片畑(2006)は、a) イメージ場面で、最終的に選んだ位置とその位置に対する感じを質問している。b) 実際場面でも、実際にみてどう感じるかを質問している。c) 質問紙によるデータ収集を行っている。d) 質問紙の記述をもとに、インタビューしている。

大石(2010)では、調査において、a) 制作過程をビデオ録画している。b) 制作終了後、質問紙によりデータ収集をしている。c) 質問紙を基に、インタビューしている。

一部の研究では、記録されたデータが分析にどのように使用されたのか、不明な場合があった。しかし、概ね、上記先行研究では、調査によるデータ収集方法や分析方法、あるいはその両者において、複数の方法が組み合わせられていることがわかる。このように先行研究の中には、多元的方法、方法のトライアングレーションが実施されている場合があることが確認された。

II-4. 先行研究と筆者の研究の比較

箱庭制作における主観的体験に関する調査研究に関して、多元的方法、方法のトライアングレーションの観点から、一連の筆者の研究と先行研究を見てきた。本章の最後に、先行研究との比較により見いだされた、一連の筆者の研究のオリジナリティ、限界と今後の課題について記す。

本章で、先行研究を概観したところ、先行研究においても、多元的方法、方法のトライアングレーションが実施されていることがわかった。しかし、一連の筆者の研究にオリジナリティがあるとすれば、以下のa)、b)の2点にあるだろう。

a) 同一データに対して2種の異なる質的研究法を併用し、多角的、総合的にデータを分析し、知見を得ている点である。このような研究法は、箱庭制作における主観的体験に関する、先行調査研究では行われていなかった。そして、II-2.2). (2)で検討したように、異なる質的研究法を併用することにより、単一の方法では、明らかにすることが困難であった観点から分析することが可能になり、総合的な考察が可能になった。

b) 通常の箱庭療法にできるだけ近い状況において収集した、継続した箱庭制作における、制作者の主観的体験のデータによる研究という点にある。平松(2001)もまた、継続した箱庭療法面接におけるデータを対象としているが、その分析は主に、箱庭制作後の説明過程に対してなされている。筆者の研究においては、いまだに十分な検討を実施できていない領域・テーマがあるものの、箱庭制作過程と説明過程両方に亘るデータを対象にしている点にオリジナリティがあるといえる。

筆者の一連の研究の限界と今後の課題は、石原(2008)で実施されたような、

調査研究の成果と臨床事例との総合的な検討を実施できていない点にある。このような研究を実施することによって、調査研究において見いだされた知見が、臨床事例における箱庭療法においても、どのような点においては適用が可能であり、反対に、どのような点においては異質性をもつのか、より明確にすることができるだろう。

また、筆者の研究では、ビデオ視聴による内省報告作成を、箱庭制作約1～2週間後に実施する研究計画となっている。この方法では、厳密には、その主観的体験が、箱庭制作面接時におけるものなのか、それとも、ビデオ視聴時におけるものかを判別することが困難となる。これは、一つの限界と言える。

そこで、清水（2004）のように、ビデオ視聴を箱庭制作の翌日に行うことも検討したが、筆者の研究の場合、制作過程と説明過程におけるより多くの場面について、主観的体験に即して、より細やかな内省報告を得ることを優先した。そのため、調査参加者への負荷をできるだけ軽減しつつ、より丁寧に自己の主観的体験を言語化できるよう、調査参加者が自宅で、自己の都合に合わせて、内省報告を作成できる方法をとった。そして、ふりかえり面接で、内省報告を調査者と共有化する際に、その内省が箱庭制作面接時におけるものか、ビデオ視聴時におけるものかについて、調査者が疑問をもった内省報告に関しては、そのいずれかを質問し、明確にするよう工夫した。

調査者自身もビデオ視聴による内省報告を作成した経験から、ビデオ視聴による内省報告作成に関して、感想を以下に記す。ただし、これは、あくまでも、調査者自身の感想にすぎず、厳密なデータの分析によるものではないことを断っておく必要がある。a) たとえ、箱庭制作後約1～2週間後であっても、ビデオ視聴により、制作過程と説明過程その時の主観的体験を再現することは、かなりの程度可能である。b) ふりかえり面接により、その内省報告が、箱庭制作面接時におけるものか、ビデオ視聴時におけるものかの判別も、かなりの程度可能である。

Ⅲ. M-GTAによる箱庭制作者の主観的体験に関する研究

本章では、M-GTAを用いた箱庭療法に関する研究について、検討したい。ところが、箱庭制作における主観的体験をM-GTAを用いて分析した研究は、石原（2008）、花形（2012）と筆者の一連の研究のみである。そこで、本章では、考察の対象をやや広げ、箱庭制作者の主観的体験およびそれと密接に関連したテーマにM-GTAを用いた研究も含め、考察したい。

Ⅲ-1. M-GTAまたはGTAの観点による筆者の研究法に関する検討

楠本（2012）に対して、M-GTAまたはグラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）の観点から、検討する必要がある。それは、楠本（2012）の研究手続きは、M-GTAが求める手続きを完全に実行できているとは言い難い点があるためである。そのため、データ収集と理論的サンプリングと理論的飽和化

に関する問題を中心に取り上げる。

まず、データ収集と理論的サンプリングについて考える。木下（2003）を参照すると、データ収集と理論的サンプリングとの関連性は、2種に大別できる。つまり、a) データ収集と分析の同時並行および理論的サンプリングによる新たなデータの収集という方法、b) ベース・データと追加データへの2方向への理論的サンプリング、の2種である。

a) は、GTAのオリジナル版などで説明される方法であり、フィールドワークによる調査方法と適合的である。この場合、「最初のデータは関連しそうなものであればよいのであって要はそこから分析を開始し理論的サンプリングを作動していくということになる」。「明らかになりつつある解釈に基づきその適否を見極め、解釈を確定するために、比較思考に立脚する理論的サンプリングにより次に収集すべきデータが何であるか判断する」ことになる（木下、2003、pp.114-115）。

それに対して、b) は、M-GTAで提唱されている方法であり、面接（インタビュー）型調査への適用が強く意識されている。M-GTAは、データに基づいた（grounded-on-data）分析であり、データとの関係はデータから（from data）とデータに向かって（toward data）の2方向に分かれ、相互に関連させて分析が進められるとされている。その後者は、「概念を比較材料としてそれと類似あるいは対極の概念の可能性を考え、データに向かって実際にそうであるかどうかの検討」を行うことである。その自分の解釈に照らして目的的にデータに向かう流れを、理論的サンプリングと呼ぶとしている（木下、2007、pp.50-51）。M-GTAでは、「理論的サンプリングと継続的比較を行うが、データの収集と分析の同時並行性に関しては最初にまとめて収集したデータ（これを『ベース・データ』と呼ぶ）と分析過程にもとづき追加収集されたデータ（同様に『追加データ』と呼ぶ）の二段階に分けて進める」（木下、2003、pp.123-124）。そして、理論的サンプリングは、ベース・データと追加データに対する2方向で行い、その基本は、ベース・データに対する理論的サンプリングであるとする。また、すでに、収集が終わっているデータを分析する場合は、方法論的限定として、ベース・データと追加データをはっきり2段階に区別する方法の変形であり、以下のような点に留意する必要があることを指摘する。追加データは収集できないため、a) ベース・データに対する限定をいっそう明確に提示すること、b) データとの確認が不十分な概念や理論的サンプリングにより確認すべきデータがわかっていても実際にできなかった部分について、論文にその旨を明示する必要がある、としている（木下、2003、pp.128-129）。

次に、理論的飽和化について、検討する。GTAにおいて、分析の終了は理論的飽和化をもって判断する。つまり、「継続的比較分析により分析を進めていったときにデータから新たに重要な概念が生成されなくなり、理論的サンプリングからも新たにデータを収集して確認すべて（ママ）問題点がなくなったときを

もって、飽和化したと判断するとされている」。木下（2003）は、このような説明では、どのように理論的飽和化の判断を行うのか難しいことを指摘している（pp.220-221）。そこで、M-GTAでは、grounded-on-dataが成立しやすいように分析対象とするデータを限定的に確定した上で、a) 分析の最小単位である概念について分析ワークシートの完成度で「小さな理論的飽和化」の判断を下し、次に、そうして確認的に判断された概念によって構成される分析結果全体に対して「理論的飽和化」の判断を下す（木下、2007、p.52）。また、理論的飽和化は、理想的な形であり、完璧に実践しなくてはならないものではなく、その意味を理解した上で、それぞれの分析において収斂化と拡大化との現実的な最適バランスで判断し、その判断根拠を明示する、としている（木下、2003、pp.221-222）。

筆者の研究は、すでに収集された2名のデータに対して、M-GTAによる分析を実施しようとするものである。まずは、A氏の箱庭制作面接10回分のデータに対して、M-GTAによる分析を実施した。それは、確かに、A氏一人だけのデータではあるが、面接回数は10回実施されており、各回のデータを独立したインタビューによるものと考えた場合、M-GTAに必要とされるデータ例の目的を満たすと判断したためである（木下、2003、p.125）。

また、面接回数の設定があるものの、終結を迎えた継続面接による一まとまりのデータであり、「箱庭制作面接の促進要因間の交流の全体像を探索し、その概観を把握する」（楠本、2012）という研究目的に対して、その条件を満たしたデータとなっていると判断したためである。

先に検討した、データ収集と理論的サンプリングと理論的飽和化の観点から楠本（2012）を検討すると、データ収集と理論的サンプリングに関しては、概ねM-GTAが提唱する考え方に則っていると考えられる。しかし、収集が終わっているデータを分析したものであり、追加データの収集が行われていない点で、限界をもっている。今後、B氏のデータを含めて、分析の精緻化を図ることは可能であるが、B氏のデータ収集は、A氏の分析以前になされたものであり、追加データの収集とはいえない。理論的飽和化に関して、楠本（2012）では、A氏のデータ全体に対するM-GTAの分析において、データからの概念生成と修正が終了したと判断したという限定が必要となろう。そして、今後は、B氏のデータも含めた分析を進めることにより、生成される理論をより包括的で、精緻なものにしていくことが目指されるべきである。それにより、「自己理解、自己実現、自己成長を目的として、継続的な箱庭制作を実施した心理的に健康な制作者」を分析焦点者とする限定の中で、面接動機や年代に共通性をもち、かつ、性別の異なる調査参加者のデータを含めることができる。

あるいは、一連の筆者の研究で実施された、同一調査参加者に対する複数回のインタビュー実施を、Charmaz（2006）のGTAの手法を基に、異なった観点から検討することもできる。Charmazは、同一の調査参加者に複数回インタビューすることを行っている。それは、a) データの深さと範囲の広さにより

違いが生じる研究の質や信用（憑）性（credibility）を高めるための一方法であり（pp.24-25）、理論的サンプリングのための一方法である、と説明している（pp.116-117、p.120）。一連の筆者の研究で、同一調査参加者に対して、複数回面接が実施されたのは、理論的サンプリングのためではない。継続的な箱庭制作面接のプロセスを研究目的にしたためである。しかし、継続的な面接は、調査参加者から得られるデータが深さをもったものとなることに寄与した可能性は十分にある。この点に関する一つの根拠として、楠本（2012）や楠本（投稿中）で示した、系列的理解による制作者の主観的体験の変容や面接の展開についての検討による成果が挙げられる。各回単独では、体験や表現に限界がある場合でも、面接が重ねられることにより、それらの体験や表現に深まりや広がりが見られた。そして、それは調査者の制作者への理解の深化に寄与した。

Ⅲ-2. M-GTAを用いた箱庭制作者の主観的体験についての先行研究

別稿「箱庭制作過程・説明過程に関する調査研究についての文献研究」に記したように、石原（2008）は、箱庭制作者の主観的体験に関して、M-GTAを準用して、独創的な研究を行っている。「準用して」としたのは、石原が自身の研究に対して、以下のように記しているためである。その部分を直接引用する前に、その記述の前提となる部分をまず記す。

石原（2008）は、木下（2003、p.35）を参照し、GTAと呼びうる研究法の満たすべき5要件を挙げている。それは、a) データに密着した分析から独自の理論を生成する質的研究法であること、b) 分析において、コーディング方法としてのオープン・コーディングと選択的コーディング、c) 基軸となる継続的比較分析、d) その機能面である理論的サンプリング、e) 理論的飽和化の5点である。そして、自己の研究を検討し、a) の「データに密着した分析」とb) とc) に関しては、それらが該当すると考えている。しかし、自己の研究が、a) の「分析から独自の理論を生成する質的研究」とは、おそらく呼べないとしている。

石原（2008）がその理由として挙げている部分を長くなるが、以下に直接引用する（pp.17-18）。

本研究で得られるデータは、一つのミニチュアを選び、置くという箱庭制作過程における制作者の主観的な体験（の語り）である。そこから記述できるのは、制作者が制作過程でどのような体験をしているのかということであり、データに密着した分析によって、さまざまな体験のヴァリエーションを描くことができたとしても、そこから「独自の理論」を生成するところまで至るのはおそらく困難であろう。このことは、「理論的サンプリング」や「理論的飽和化」という問題ともつながってくる。

「理論的サンプリング」とは、データの分析を行うなかで、さらなるデータを収集すべき必要が出てきたときには、分析経過から見えてきた必然性に基づいて対象（サンプル）を決定していくことを指す。そして、この「理

論的サンプリング」は、これ以上新たなデータを収集する必要がないと判断される、つまり「理論的飽和化」するまで繰り返される。この考え方自体は、研究を緻密に遂行していくうえで、欠かせないものである。

さて、本研究で扱うのは、箱庭制作過程における制作者の主観的な体験である。たとえば、はじめにいわゆる適応した大学生を対象に調査研究を行い、データを集めるとしよう。そこから得られるデータを一通り分析していったとして、次に必要なデータとはどのようなデータとなるだろうか。

ここで、本研究が心理臨床学の立場から行う研究であることが、大切になってくる。心理臨床の研究は、心理臨床の実践から乖離してしまっただけではない。制作者の主観的な体験に目を向けることで、本来照準を当てたいのは、心理臨床の実践において出会うクライアントが、箱庭制作過程においてどのような体験をしているのかということである。したがって、いわゆる適応した大学生を対象に行った調査の次の段階で、そのデータを充実させていこうとすると、今度は、実践場面でのクライアントの体験に目を向けていく必要が出てくるのである。つまり「理論的サンプリング」を行うならば、臨床実践におけるクライアントの主観的体験を「サンプル」としなければならない。

ここに、心理臨床の実践に照準を合わせた心理臨床学の研究が、M-GTAの手法に馴染まない局面が立ち現われてくるように思う。心理臨床学においては、当然のことながら、心理臨床の実践が最優先事項となる。臨床実践の場を訪れるクライアントは、クライアント自身の意思で来談するのであって、セラピストがクライアントを選ぶのではない。心理臨床学の研究者は、まず何よりも心理臨床の実践家なのであり、研究者から能動的に「理論的サンプリング」を行っていくというようなあり方は、心理臨床の実践家としてのあり方と両立しない。したがって、一通り分析を終えたデータを臨床事例によって、充実させていこうとするためには、それに適した臨床事例に出会うという偶然を頼りにするより他ないということになる。

臨床事例によってデータを充実させていくことができないからと言って、いわゆる適応した大学生のデータをどんどん増やしていくというような研究を行うとしても、どこまで行ってもそれは、非臨床事例である大学生のデータであって、臨床実践で出会うクライアントの体験に直接的に迫ることにならない。

以上のような心理臨床学の研究の独自の問題と深く関連して、臨床実践に照準を当てる心理臨床学の研究では、M-GTAで言うところの「理論的飽和化」に達するのは非常に困難であると考えられる。

このようなわけで、本研究でも、おそらく「理論的飽和化」を達成するところまでデータを充実させることはほぼ不可能と考えられ、「独自の理論」を生成するところまで到達することは困難だと考えられるのである。

長い引用のため、整理すると、石原が挙げている論点は、a) 理論的サンプリング、b) 理論的飽和化、c) データの質（適応した調査参加者と臨床事例のクライアント）、d) 心理臨床学における独自の理論生成となるだろう。

筆者は、これらの論点を検討するには、さらに、M-GTAの分析テーマと分析焦点者と【応用者】の観点が加えられる必要があると考える。まずは、これらの用語について、確認したい。M-GTAでは、分析テーマと分析焦点者の2つの視点に絞って、データをみていき、解釈を行う（木下、2007、p.143）。「研究テーマをデータに即して分析していけるように絞り込んだものが分析テーマ」である（木下、2007、p.144）。研究テーマをgrounded on dataの分析がしやすいところまで絞りこむ必要が生じるために、分析テーマが設定される（木下、2003、p.131）。分析焦点者は、M-GTAの方法論的限定の一つである。「分析結果として提示するグランウンデッド・セオリーの適用可能範囲、一般化可能範囲は分析焦点者である、『人（限定集団）』から示すことになる」（木下、2007、p.157）。また、【応用者】は、発表されたグランウンデッド・セオリーの評価と関連する。M-GTAは、「発表されたグランウンデッド・セオリーは、応用されて、つまり、データが収集された現場と同じような社会的な場に戻されて、そこでの現実的問題に対して試されることによってその出来ばえが評価されるべきとする立場である。応用が検証であるという視点と、それから、応用者が必要な修正を行うことで目的に合った活用ができることを重視する。だから、ここでいう応用とは提示されたグランウンデッド・セオリーをただ機械的に当てはめるという意味での応用なのではなく、また、調査が行われたのとまったく同一の場面で当てはめるという意味でもなく—それは不可能である—、応用者がそのときの自分の状況特性と目的に基づき必要な修正をしながら用いていくのである」（木下、2003、pp.29-30）。

石原（2008）は、自身の研究に対して「分析から独自の理論を生成する質的研究」とは、おそらく呼べないとしているが、筆者には、それは厳しすぎる自己評価に思える。先に挙げた、a) 理論的サンプリング、b) 理論的飽和化、c) データの質（適応した調査参加者と臨床事例のクライアント）、d) 心理臨床学における独自の理論生成、の4点について検討していきたい。

a) 理論的サンプリングについて

石原（2008）が、理論的サンプリングに関して述べていることは、Ⅲ-1で確認した、データ収集と理論的サンプリングとの関係の問題である。石原の説明は、Ⅲ-1で示した、「a) データ収集と分析の同時並行および理論的サンプリングによる新たなデータの収集という方法」に準じたものとなっている。しかし、M-GTAの場合、理論的サンプリングは、ベース・データと追加データに対する2方向で行い、その基本は、ベース・データに対する理論的サンプリングであると考えられるわけであるから、石原の研究の場合、ベース・データに対する理論的サンプリングは実施されていると考えてよいのではないか。そして、

追加データを収集できなかった場合の留意点に関して、明示することで、一定の要件を満たすと考えてよいのではないか。

b) 理論的飽和化について

この論点は、M-GTAにおける理論的飽和化についての考え方、分析焦点者と関連していると考えられる。石原（2008）の場合、分析焦点者は、例えば、「適応した箱庭制作者」となるだろう。そのような限定を行った上で、理論的飽和化に関しては、やはりⅢ-1で検討した木下の考えに従うことで、解決されるのではないだろうか。つまり、概念について分析ワークシートの完成度で「小さな理論的飽和化」の判断を下し、次に、そうして確認的に判断された概念によって構成される分析結果全体対して「理論的飽和化」の判断を下す（木下、2007、p.52）。理論的飽和化は、理想的な形であり、完璧に実践しなくてはならないものではなく、その意味を理解した上で、それぞれの分析において収斂化と拡大化との現実的な最適バランスで判断し、その判断根拠を明示するとの考えである。

c) データの質（適応した調査参加者と臨床事例のクライアント）とd) 心理臨床学における独自の理論生成について

この両論点は、密接に関連している。このテーマに関する石原（2008）の論は、確かに納得できる点がある。しかし、c) に関して、M-GTAの研究手法で言えば、分析テーマと分析焦点者の限定を行うという方法で、解決可能だとも考えられる。つまり、「箱庭制作の過程における制作者の主観的体験に焦点を当て、この観点から箱庭療法について検討する」（石原、2008、p.20）ことを分析テーマとし、先ほどの分析焦点者の限定を加えるということである。これでは、確かに、M-GTAの分析において、臨床事例におけるクライアントの主観的体験を包含することにはならない。しかし、だからと言って、筆者には、石原の研究の価値が著しく低下するように思えない。

そして、心理臨床学における独自の理論生成に関しては、【応用者】による評価を待つということになる。つまり、石原（2008）で得られた知見が、臨床事例におけるクライアントの箱庭制作に関する主観的体験と、どの点では合致し、どの点では違いがあるのかは、多くの箱庭療法家による実践や生成された理論の【応用】や事例研究などにより、評価されていくべきだということである。臨床事例には、確かに、その独自性が存在する。しかし、臨床事例のクライアントの心性と心理的に健康な人々の心性の間には、隔絶された溝があるのではなく、「スペクトラム」と表現できるような連続性もある。それゆえに、心理的に健康で、適応した箱庭制作者の主観的体験からデータに密着して生成された理論には、臨床事例にも適用可能な理論が存在する可能性は十分にあると考えられる。石原自身、臨床事例と調査事例の比較を行っている。そして、砂箱が制作者にどのように体験されるのかを検討している。そこには、a) 両者に共通する体験として、空間を限定する現物の砂箱と、b) 調査事例にのみ

見られた、まるで枠がないかのようにどこまでも広がるイメージの中で背景に溶け込む砂箱体験があった (pp.219-226)。また、箱庭療法が、臨床事例だけでなく、心理に健康な人々の自己実現や自己理解の促進のために行われることもある。それらを総合的に勘案して、研究内容が評価される必要があるだろう。

以上、検討してきたが、石原 (2008) がM-GTAを用いた調査研究および事例研究から総合的に得た知見には、確かに石原自身が述べる一定の限界をもちつつも、単なる調査研究を超え、心理臨床につながった独自の理論が存在する、と筆者は考える。

花形 (2012) もM-GTAを用いて、箱庭制作者の内的プロセスを分析している。この研究は、初回箱庭制作における内的プロセスに焦点を絞っている。M-GTAにより、【事前イメージ】【戸惑い】【体験過程の変化】【制作意欲】の4つのカテゴリー・グループが生成されている。そして、結果図が示されている。その結果図を単純化して示すと、【事前イメージ】⇨【戸惑い】⇨【体験過程の変化】⇨【制作意欲】となる。このように、データに密着した分析から生成された独自の「初回箱庭制作における制作者の内的プロセスのモデル」が構築されている。また、花形の研究は、理論的サンプリングによる追加データの収集を順次行っている。箱庭制作者の主観的体験に関する研究において、このように理論的サンプリングによる追加データ収集を行った研究例は、他になく、M-GTAの手続きと整合性が高い研究となっている。

大石他 (2011) は、M-GTAにより、特別養護老人ホーム入居者の箱庭制作における制作者と箱庭とのかかわりを分析している。この「かかわり」に関するデータとして、調査者が記録した、制作者の箱庭とのかかわりの様子や周囲の状況が用いられている。概念の具体例を見ると、制作者の発言に加えて、調査者の観察記録が用いられている。一連の筆者の研究との関連でいえば、制作者の主観的体験のデータに加えて、制作者の行動や周囲の状況に関する観察データが含まれている点で異なっている。

大石他 (2011) では、このようなデータがM-GTAで分析され、「Ⅰ. 『鮮やかさ』に触発される感情、Ⅱ. アイテムとのやりとりを通した『鮮やか』とのかかわり、Ⅲ. かかわりのなかで浮かび上がる『鮮やかさ』、Ⅳ. 『鮮やかさ』から距離を置く動き、という四つの大カテゴリーが生成された」(p.317)。全体像として、結果図が描かれ、大カテゴリーⅠが、全体を覆うなか、大カテゴリーⅡとⅢが同時並行的・重層的なものとして、入居者と箱庭とのかかわりを構成しているとする。そのようなかかわりから離れる動きとして、大カテゴリーⅣを位置づけている。そして、「入居者と箱庭とのかかわりとは、両面的な感情、さまざまな距離感や濃淡のなか、『鮮やかさ』とのかかわりを積み重ねることで、揺さぶられつつ、そこに自身の存在感が織り込まれ、新たな『鮮やかさ』として浮かび上がるプロセスであった」との結論を得ている。さらに、制作者と箱庭とのかかわり自体の意味の研究は、先行研究では十分に検討されておらず、「鮮

やかさ」という視点は、作品の解釈を行うだけでは十分にそこで生じていることの意味を汲み取れないような状況において、セラピストが箱庭と向き合う際の視座を提供することになる、としている (pp.324-327)。このように、大石他 (2011) は、データに密着した分析から、独自の理論を生成した、興味深い研究となっている。

Ⅲ-3. 先行研究と筆者の研究の比較

前節で、M-GTAを用いて、箱庭制作者の主観的体験 (あるいはそれを含んだ) を分析した研究を概観した。このようなタイプの研究は、まだ、数は少ないものの、それぞれの研究において、独自の理論やモデルが生成されていた。それらの研究と楠本 (2012) との比較により見いだされた、筆者の研究のオリジナリティ、限界や今後の課題について記す。

筆者の研究も含む、箱庭制作者の主観的体験をM-GTAを用いて分析した研究群は、M-GTAを用いているという点では共通性をもつが、分析テーマや分析により得られた知見は、それぞれ独自である。このような意味では、楠本 (2012) にはオリジナリティが存在すると考えてもよいだろう。a) 【制作過程と外界・日常生活の交流】 (図2の⑥) と、b) 【単一回の制作過程・作品と作品の連続性や変化の交流】 (図2の⑪) および 【箱庭制作面接のプロセスと心や生き方の変化・成長の交流】 (図2の⑫) に関する考察は、他のM-GTAを用いた調査研究では、取り上げられていない。また、継続した箱庭制作面接におけるデータであることも、他の調査研究とは異なる独自性をもっている。

筆者の研究の限界や課題は、a) 理論的サンプリングによる追加データの収集ができていない点と、b) 心理的に健康で、適応した制作者のデータであるという点と、c) M-GTAによる、詳細な考察をまだ実施できていない領域・テーマがある点である。

a) に関して、今後、必要なデータを追加収集することは不可能ではないものの、現時点では、調査参加の申し出があるわけではないので、一旦、A氏により生成した理論の精緻化のために、B氏のデータを加え、分析することが、現実的な到達点だろう。

b) に関して、臨床事例のクライアントに対して、筆者が行ったような調査を行うことは侵襲性が高いため、実施すべきではないと考える。たとえ、心理的に健康な調査参加者であっても、筆者が行った調査方法には、いくつかの課題があり、配慮が必要であった。それに関して、楠本 (投稿中) で検討しているため、以下に引用する。

内省報告、ふりかえり面接は、本研究において必要な調査方法であるものの、その課題・限界も示唆された。

第4回ふりかえり面接で、制作者は、箱庭制作面接では深まっていく感じだが、ふりかえり面接では平行移動するような感じと語った (4-ふり

かえり)。調査者は、ふりかえり面接が制作者の自己成長を阻害してはいないか危惧し、質問した。制作者は**大きな支障はない**と答えたが、ふりかえり面接は内的プロセスの深まりを小休止させる危険が示唆された。そこで、ふりかえり面接を慎重に継続するが、制作者の自己成長の促進が本面接の第一目的であることを再確認した。

また、ビデオ視聴による内省報告作成は、研究への関与・動機づけが強くないと継続が難しいため、調査参加者の選択や意思確認に慎重な検討・配慮が必要である。さらに、内省報告により、過度の知性化を起こさないための配慮も必要だった。本研究では、知性化を疑わせる内省報告箇所に対して、ふりかえり面接での質問を控え、それ以上の言語化を回避した。それにより、知性化をできる限り避け、箱庭制作におけるイメージの生命力やイメージの自然な流れを尊重できるよう、配慮した。

すると、石原（2008）について検討した部分と重なるが、楠本（2012）においてM-GTAによって生成された理論に関しては、【応用者】による評価を待つということになる。楠本（2012）で得られた知見が、臨床事例におけるクライアントの箱庭制作に関する主観的体験と、どの点では合致し、どの点では違いがあるのかは、多くの箱庭療法家による実践や生成された理論の【応用】や事例研究などにより、評価されていくことになる。

c) については、今後、B氏のデータを加え、M-GTAの分析を実施した上で、楠本（2012）では、充分に取り上げられなかった領域・テーマについて、詳細な考察を実施していきたい。

IV. 結論

Ⅱ～Ⅲに亘って、それぞれ異なる観点から、一連の筆者の研究のオリジナリティ、限界、今後の課題について、検討してきた。本章では、別稿「箱庭制作過程・説明過程に関する調査研究についての文献研究」で検討した観点も一部含め、それらの内、中心的な論点に関して総合的に考察する。

IV-1. オリジナリティに関して

一連の筆者の研究と共通性をもつ、先行研究は少なくなかった。そのため、筆者の研究にオリジナリティを見出せるとすれば、それは複数の要因の組み合わせによるものとなる。それを、1) 研究テーマと2) 研究方法の両観点から、整理したい。

1) 研究テーマ

研究テーマにおいて、筆者の研究は、大枠では、石原（2008）と共通性をもっている。それは、どちらも、「箱庭制作過程における制作者の主観的体験」に焦点を当て、研究開始時点ではより詳細な研究テーマを設定していないため

ある。そこで、筆者の研究のオリジナリティを見出すためには、他の要因を付加して検討する必要がある。それらの要因は、通常の箱庭療法にできるだけ近い状況における制作者の主観的体験に関する研究という点にある。それは、以下のa)～d)が総合的に実現されていることにより、保証されている。a) 調査目的のみではない、制作者の自己理解・自己実現・自己成長を目的とした面接場面であること、b) 継続した箱庭制作面接であること、c) 箱庭制作過程と説明過程両方に亘るデータであること、d) ミニチュアの使用制限を行っていないこと、の4点である。

2) 研究方法

先行研究においても、多元的方法、方法のトライアングレーションが実施されていることがわかった。しかし、一連の筆者の研究にオリジナリティがあるとすれば、以下の点にある。それは、同一データに対してM-GTAと単一事例質的研究という2種の異なる質的研究法により、多角的、総合的にデータを分析し、知見を得ている点である。このような研究法は、箱庭制作における主観的体験に関する、先行の調査研究では行われていなかった。そして、異なる質的研究法を併用することにより、単一の方法では、明らかにすることが困難であった観点から分析することが可能になり、総合的な考察が可能になった。

IV-2. 限界と今後の課題に関して

1) 研究テーマ

筆者の研究の限界は、心理的な問題・課題を抱えた臨床事例による研究でない点が挙げられる。これに関しては、一連の筆者の研究で得られた知見に関して、M-GTAという【応用者】による評価を待つということになる。つまり、筆者の研究で得られた知見が、臨床事例におけるクライアントの箱庭制作に関する主観的体験と、どの点では合致し、どの点では違いがあるのかは、多くの箱庭療法家による実践や生成された理論の【応用】や事例研究などにより、評価されていくことになる。

また、今後の課題として、以下の2点が挙げられる。a) M-GTAによる詳細な考察が、一部の領域(図2の⑥、⑪、⑫)に留まっており、箱庭療法を巡る全体的な知見を得るためには、詳細な考察ができていない領域を考察する必要があること、b) 現状では、A氏のデータだけの分析に留まっており、少なくともB氏のデータを加え、生成した理論を精緻化し、一般化の可能性をより高める努力が必要であること、の2点である。

2) 研究方法

筆者の研究の限界は、理論的サンプリングによる追加データの収集ができていない点である。今後、必要なデータを追加収集することは不可能ではないものの、一旦、A氏により生成した理論の精緻化のために、B氏のデータを加え、分析することが、現実的な到達点となる。

本稿は、指導者に直接的な指導を受けず、筆者一人で考察を進めてきた。そのため、議論に不備な点があるのではないかと、特に、質的研究法に関する検討に関して、筆者の誤解や議論の不足があるのではないかと懸念がある。箱庭療法の研究者や実践家、質的研究法をもちいた研究を実施している研究者の方々に、本稿に関するご指導、ご指摘をいただければ、幸いに思う。

注：

* 1 楠本（2011）、楠本（2012）、楠本（投稿中）は、治療面接のデータを基にしていないため、箱庭療法という語は用いず、箱庭制作面接とした。ただし、本稿で、他の研究者の研究に言及する場合には、その研究者の用法に従い、箱庭療法という語を使用する場合がある。

謝辞：

佛光大学博士後期課程在学中より、東山弘子先生、石原宏先生から、たびたびご指導いただいたことで、箱庭制作過程・説明過程における制作者の主観的体験に関する研究を、進展させることができた。こころより感謝を申し上げます。

東山絃久京都大学名誉教授には、大阪教育大学修士課程在学中より、永きにわたって、箱庭療法をはじめとする心理臨床に関して、ご指導いただいた。厚くお礼を申し上げます。

付記：

本稿は、2012年度南山大学パッへ研究奨励金 I - A - 2 による成果の一部である。

引用文献

- Bloor,M.&Wood,F.:Keyword in qualitative methods:A vocabulary of research concepts. London:Sage,2006（上淵寿監訳：質的研究法キーワード. 金子書房. 2009）
- Charmaz,K.:Constructing grounded theory:A practical guide through qualitative analysis.London:sage,2006（抱井尚子・末田清子監訳：グラウンデッド・セオリーの構築：社会構成主義からの挑戦. ナカニシヤ出版. 2008）
- Denzin,N.K.&Lincoln,Y.S.:Introduction:The discipline and practice of qualitative research, In N.Denzin & Y.S.Lincoln (eds) ,Handbook of qualitative Reserch (2nd.ed) ,London,Thousand Oaks,New Delhi:Sage. pp.1-29.,2000（平山満義監訳、岡野一郎・古賀正義編訳：質的研究ハンドブック1巻 一質的研究のパラダイムと眺望. 序章：質的研究の学問と実践.北大路書房. 2006）
- Flick,U.:Qualitative forschung.Hamburg:Rowohlt,1995（小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子訳：質的研究法入門 ―<人間の科学>のための方法論.

- 春秋社.2002)
- 花形武：初回箱庭制作における内的プロセスについて ―箱庭制作経験のない大学生・大学院生を対象に修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて. 箱庭療法学研究, 25 (2), pp.91-100. 2012
- 平松清志：箱庭療法のプロセス ―学校教育臨床と基礎的研究.金剛出版.2001
- Holstein,J.A.&Gubrium,J.F.:The active interview,the United States,London and New Delhi:Sage,1995 (山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆行訳：アクティヴ・インタビュー ―相互行為としての社会調査.せりか書房.2004)
- 石原宏：制作者の体験からみた箱庭療法の「治療的要因」に関する心理臨床学的研究. 平成17・18・19年度科学研究費補助金若手研究 (B) 研究成果報告書.2008
- 伊藤真理子：イメージと意識の関係性からみた箱庭制作過程. 箱庭療法学研究,17 (2) ,pp.51-64. 2005
- 片畑真由美：臨床イメージにおける内的体験についての考察 ―箱庭制作体験における「身体感覚」の観点から.京都大学大学院教育学研究科紀要, 52. pp.240-252. 2006
- 木下康仁：グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 ―質的研究への誘い. 弘文堂.2003
- 木下康仁：ライブ講義M-GTA ―実践的質的研究法修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて.弘文堂.2007
- 木下康仁:質的研究と記述の厚み ―M-GTA・事例・エスノグラフィー.弘文堂.2009
- 楠本和彦：箱庭制作過程および説明過程に関する質的研究の試み,佛教大学大学院紀要教育学研究科篇,39,pp.103-120,2011
- 楠本和彦：箱庭制作者の自己実現を促進する諸要因間の相互作用 (交流) に関する質的研究. 箱庭療法学研究, 25 (1), pp.51-64. 2012
- 楠本和彦 (投稿中)：箱庭制作者の主観的体験に関する単一事例の質的研究. 箱庭療法学研究, 25 (3), 2013 (掲載予定)
- 大石真吾：箱庭制作における砂の作用に関する一研究 ―作り手の主観的体験にもとづいて. 箱庭療法学研究,22 (2) ,pp.63-71. 2010
- 大石真吾・高橋優佳・森崎志麻・浅田恵美子・井芹聖文・千秋佳世・加藤奈奈子：特別養護老人ホームに箱庭を持ち込む試み.心理臨床学研究, 29 (3) ,pp.317-328.2011
- Schwant,T.A.:The SAGE dictionary of qualitative inquiry 3rd edition,London & New Delhi:Sage,2007(伊藤勇・徳川直人・内田健監訳:質的研究用語事典.北大路書房.2009)
- 清水亜紀子：箱庭制作場面への立ち会いの意義について ―ビデオ記録を用いたプロセス研究の試み. 箱庭療法学研究,17 (1) ,pp.33-49.2004
- 山本力：研究法としての事例研究. 山本力・鶴田和美編著, 心理臨床家のための「事例研究」の進め方. 2章. 北大路書房. 2001